

「人生の三大祝日（二）」

（昭和四十年 七月發行）

春萌え出たとみるや、夏には早や枯れ行く草も、朝に生れて夕べに死ぬる儚い蜉蝣かげろうのような小動物も、およそ生のある限りは種子と子孫を後世に遺さぬものとははない。すべての動植物が生死の輪廻を繰り返して、未来永劫に存続している事実こそ、神から授けられた永生の神業である。

生死の問題も宇宙の主催者である神の目から観れば、幾十萬年の昔も、今も、はたまた幾千幾百萬年の未来も、何等変りはないのである。昆虫は時期々々によって幼虫となり、蝶となり、蛾となり、また樹間の卵となる。卵は虫の初めであり、また終りである。初卵と終卵とは果して同じものであるか。所詮、これは単なる一種の変化に過ぎないのである。

人もまた幼年時代・少年時代・青年時代・壮年時代・老年時代を経て、死の姿にかえるは、これを要するに、永劫の未来につらなる死滅することのない生命の進行中における過程的な変化に過ぎないのである。

この體は神が生成し給うた祖先伝来の肉體である。宇宙萬物は神がこれを創造し給うた時から幾萬年、幾百萬年の間、同一体であって、未来永劫少しも変るところはないのである。永世の過程として死滅しないものは固着して変ることがない。人は生死をもって萬物生成化育の神業進展のうち起こる最も芽出度い事柄であると受け取るべきである。